雪舟国際美術協会展について

雪舟国際美術協会展には、前年度から無鑑査会員として出展しております。

大天井岳からの眺望で、槍のモルゲンロート「赤槍」での出展です。

井上靖の小説「氷壁」には、前述事件の他に、実話「槍の北鎌尾根の冬季遭難」もモデルになっております。(※参考図書　風雪のビバーグ(松涛　明))

二つの実話は、小説の中で旨く活かされて、ザイル事件の解明、友情恋愛の確執等を織り成す物語に構成されており、又、映画「氷壁」では、菅原健二、川崎敬三、山本富士子、野添ひとみの配役で、昭和の時代背景や古き上高地の情景等が映し出されており、アルピニストには一見の作品です。

一流のアルピニストが挑んだ冬季山稜は、限りなく魅力的であり、複雑ダイナミックな雪渓等、最後まで集中して筆を取ることができました。

北鎌尾根は、夏場に縦走しており、表銀座縦走路の大天井岳ヒュッテの近場から貧乏沢を下り、北鎌沢右俣から北鎌のコルへ登り、そこから北鎌尾根縦走が始まります。

ヒュッテに一泊して早朝 4 時出発、その日のうちに頂上まで完登しましたが、独標手前からは難所が続きルートファイディングも難しく、途中下山するルートもないことから槍の頂上まで一気に登りきることが条件とされており、天候悪化となれば避難箇所がなく落雷の危険にさらされることになります。

冬場は更に厳しきを増し想像を絶します。

「赤槍」(P50 号　80×117cm)

六本木という場所柄いろんな方が来場されて、前年度は、小泉進次郎氏(衆議院議員)も真剣な眼差しで各作品を鑑賞されておられたとのことです。

展示会場では、来場者からの自由なメッセージがカード記入で作家へ述べられるようなっており、前年度は、

「夜明けのこの景色を実際に見られたようで良かったです。アートの知識はないですが、心穏やかに観られる作品が、今の私にとって必要だったことに気づきました。」

「すがすがしい朝の山の空気が感じられて、心に希望と凛としたものが得られました。」

「北アルプスの厳しくも美しい山々、槍へと向かっていく稜線に引き込まれました。常念乗越から初めて槍を見た時のことが思い出されます。」

「山脈をここまで優しく描いた作品を見たのは初めてです。厳しさ、優しさ、様々なメッセージを感じました。」

「力強い作品で引き込まれる感じがしました。また、山に登りたくなりました。」

等のメッセージを戴いており、今回の制作においても活力となり、最後の筆まで励ましの糧となった次第です。

お陰様で出展作品は、防府市長賞を受賞しましたが、皆様からのメッセージも評価に繋がったものと思われて有難く感謝している次第です。

防府市は雪舟ゆかりの地でもあり、毛利家本屋敷内の毛利博物館には雪舟絵画の国宝「山水長巻(四季山水図)」が所蔵されており、展示会場には、毎年同山水図の複製(16m)が展示され、又、国宝「天橋立図」の複製も展示されている。

前年度出展「アルプスの夜明け」　国立新美術館展示場内

雪舟について

雪舟は、1420(応永 27)年、備中(現在の岡山県)の総社あたりに生まれて、幼くして禅僧となるべく「涙で鼠を描いた」のエピソードで知られる宝福寺に入り、その後京都・相国寺に身を寄せて、そこで当時水墨画の第一人者であった同寺の周文に絵を学び、才能を開花、周防(山口県)へと下り。守護大名大内氏の庇護の下に引き立てられて、多岐にわたり活躍場を広げていく。

その後、1467(応仁元)年、遣明船で寧波に渡り、画僧であることから「本場の水墨を学ぶため」という建前で大内氏の遣明船使節の一員として中国に渡るのであるが、大陸との関係を重要視していた大内氏の命を受けて、対中交渉の中心となるグループに属して重要施設等情報収集、唐物水墨画等の買付け(画商)等に携わり、また大陸要人との交流を図り遣明使節一行を成功に導き、現地名刹天童寺では首座(名誉教授のようなもの)の称号を送られる等の待遇を受け、その他多岐にわたり功績を残している。

画業に関しては、浙派の画法を学びながら、多くの文人とも交流を持ったが、これといった画師には遭遇できておらず、もっぱら大内氏からの命による水墨画の買付けにおいて、相当数の画に接する機会があったものと思われて、自然と画を見る能力を身に着けていったのではないかとも思われる。それに加えて、中国の大地を歴覧して、揚子江等に聳える大自然の山水を実感できたことが、山水画の原点を理解するのに繋がり、その後の画業に大きく影響したものと思われる。

遣明使は室町時代足利義満により始められたが、主要目的は貿易、要するに銭儲けであり、この日明貿易による膨大な利益は、幕府や有力大名そして寺院にとって経済的な大きな支えとなっていた。大内氏は明貿易で得た莫大な財力で幕府の後見人として都でも勢力を伸ばしており、当時勃発していた応仁の乱にも大きく関わることになる。

帰国後、雪舟は、大内氏のブレーンとして応仁の乱の終息に奔走し、唐帰りの画僧としての地位を活用して各地大名、武家等要人との接触を図り、情報収集、又、各地で絵の手習いを施した者を弟子として登用し、人的ネットワークを構築して全国各地の弟子から情報得て活用する等して、室町幕府の動静に関わっている。

大内氏の資金援助の下に各地を訪れているものと思われるが、各地への足跡は殆ど残されていない。

雪舟が本格的に絵に専念するのは、応仁の乱終息後、守護大名大友正弘から、これまでの働きに対する労らいで画室「雲谷庵」(現在の山口県山口市天花付近)が与えられてからであり、その後、「山水長巻（四季山水図）」(67 歳作)等の 6 点の国宝は描かれて、大内氏への恩に報いるために献上されたものが同「山水長巻」である。

画聖雪舟の素顔を知るにつけて、応仁の乱という波乱万丈の時代において、影の主役として時代を動かした知性は、乱の終息とともに新たな水墨世界を開花させて、島根県益田市「大喜庵」で、1506(永正 3)年 87 年の生涯を終えるまで絵画の可能性を徹底して探求しており、その卓越な筆跡により時を超えて今もなお現代の芸術家等に影響を与えながら栄光に輝き続けている。

第30回記念
雪舟国際美術協会展

作品公募　　日本画・水墨画・書

— 書画はもっと自由になれる —

2023年12月13日(水)～24日(日)　全11日間開催 ※12月19日(火)は休館日

国立新美術館(1階展示室1C・1D) 午前10時～午後6時 ※最終入場時間 午後5時30分

【主　　催】一般社団法人 雪舟国際美術協会

【後　　援】岡山県総社市／岡山県井原市／島根県益田市／島根県益田市教育委員会／山口県防府市／山口県山口市／広島県三原市／中国・中国美術学院／中国・浙江画院／中国・浙江省文化芸術発展有限公司／中国・寧波市藝雲堂文化交流中心

【協　　力】益田市雪舟顕彰会

コロナ禍が収束したとは言えない中、徹底した感染対策を講じて開催する美術展のありかたが浸透しつつある 2022 年末、第 29 回雪舟国際美術協会展が開かれました。外出や入国の規制が緩和された影響もあってか、前 2 年に比べて来場者は大幅に増え、特に土日は入場者の流れが途切れないほどの盛況ぶり。特にその 1/3 程度を占めた外国人来場者たちは、日本美術に強い関心を寄せており、熱心に鑑賞する姿が多く見られました。会員と一般応募を含め全国から寄せられた入選作品は 204 点。学生特別出展では桜美林大学の 7 点に加え、日本大学芸術学部から 6 点を展示、若い斬新な感性が会場を彩りました。また、一般社団法人白山令峰会のご厚意で特別展示として出品された、チベット仏教絵画の原画 6 点も来場者の関心を集めました。

◆ 美術評論家、審査員の中野中氏より会員や出展者の方に向けてメッセージを頂戴しました

雪舟国際美術協会展は、ヒエラルキーの強い公募団体や美術団体と違い、美術界を横断してどんな立場の方でも作品重視で公募、出展ができる有意義な展覧会。縦のつながりを抜きにして自由に発表できる。互いに切磋琢磨し、一人の作家として気兼ねなく作品を制作できる事は作家にとって重要な事でしょう。良い出会いの場、良い作品発表の場として今後も続けてもらいたい。